

## Bless Me, Ultima における「対価」の概念

志水 智子

ニューメキシコ州の自然を背景に少年の成長を描くルドルフォ・アナヤの *Bless Me, Ultima* (1972)において主人公の少年アントニオはカトリックを前提とするコミュニティーに生まれ育ちながら、同居することとなったクランデラ（呪術師）であるウルティマの教えの方にはるかに親しみを感じ、学びを得る。アントニオは母からは神父になってほしいと期待されており、カトリックの行事が彼の生活全般を覆っているのだが、カトリックの神や儀式は彼の心には全く響くことがない様子が徹底して描かれていることも印象的な作品である。カトリックは純粋な少年が初めてぶつかる不条理と大人たちから押し付けられる因習の表象と考えられる。そしてこの作品では、カトリックとニューメキシコの民間信仰、無垢と経験、バケーロと農夫、征服者とサルタン、自然と科学、善と悪など、さまざまな対立する要素が描かれながら、これらは実は一体化し、調和していることがアントニオによって認識されていく。さらに、対立する要素が調和する場合にはすべてそのための「対価」が払われていることが示唆されることにより、アントニオがカトリシズムの中で感じた人生への不条理感は解消されていくと考えられる。本稿では、アントニオはこの「対価」の概念を一つの論理として認識することで不条理感から解放されるとともに自然や人生の厳しさを学ぶこと、そしてその「対価」の概念に、作者アナヤの人間信頼の気持ちと楽観的未来観が読み取れるのではないかとすることを主張していく。

まずアントニオにとって懐疑をもたらすカトリックの行事や教えは、機能不全の「対価」を浮き彫りにし、「対価」が機能しないことを認識することが、アントニオが自分で物事を考え判断する出発点となっている。カトリシズムの価値観の中で、人生の不条理の存在理由を知りたいアントニオが最も期待を寄せ、そして幻滅を味わう象徴的行事として描かれるのが彼の初めての聖体拝領である。それまでに彼は、同情の余地があると思われるルピトや善人ナルシソに死をもたらし、悪人テノリオの殺人行為を放任し、異教の神を信仰しただけで容易に重い罰を与えるカトリックの神の意図を論理的にとられることができず苦悩する。それゆえに神を体内に取り込むという聖体拝領の儀式に対するアントニオの期待は高まるが、幻滅に終わる。

また、人間はどれほど罪を犯しても死ぬ前に告白してお祈りをすれば天国に行けるというカトリックの思想について、“... it doesn't seem fair” (192)と率直に指摘する友人フロレンスに同意し、アントニオは“‘No, it didn't seem fair, but it could happen. This was another question for which I wanted an answer to.’”(192)と考える。フロレンスの生い立ちは不条理と神の不在、機能不全の「対価」を伴う信仰を象徴する。フロレンスは幼い時に父母を失い、姉は生活のために皆からさげすまれる売春婦にならざるを得なかったという過酷な家庭に育った。フロレンスは神を信じておらず、告白するべき罪は何もないと言い切るばかりか、“I have not sinned!” (213)、“It is God who has sinned against me!” (213)、“... I say God has sinned against me because he took my father and mother from me when I most needed them, and he made my sisters whores — He has punished all of us without just cause, Tony.” (213)と言って、幼い子どもから無意味に多くの犠牲を要求するばかりで、その意義も「対価」も提示することのない神を真っ向から批判する。多大な不条理を神のいかなる意図の結果にとらえるべきか苦悶し、神への不信に向かうというテーマは、病苦に満ちた子供たちの病院を舞台とするアナヤの *Tortuga* (1979)においても繰り返されており、神への不信感は人間が人生の不条理に神の意図ではなく自分にとっての意義を見出すきっかけとなる。

アントニオが遭遇する3つの死はそれぞれ人生の不条理を表し、それらに対してアントニオは「神父」として今生の不条理を来世において解消する役目を果たそうと試みる。戦争による心的外傷のせいで他者の命を奪い、自らも殺されるルピト、暴力と犯罪の被害者として命を失うナルシソ、不慮の事故によって若い命を落とすフロレンスはアントニオが感じる神の沈黙と不条理を体現しており、カトリックの「神父」の役目を負うアントニオの存在を「対価」として彼らの不条理な運命が解消されたとはアントニオにはとても思えない。ところがウルティマの死に際する時のみアントニオは「神父」の役目ではなく死にゆくウルティマから祝福される立場となる。善なるウルティマの死がテノリオの悪を解毒するための「対価」となることと、自然から与えられた人間の運命に手を加えたテノリオもウルティマも死ぬことで世界の均衡が回復するという教えはアントニオにとって論理性を持ち、人生の悲しみを「対価」として逞しく成長するようにと説くウルティマの祝福はアントニオの心に届くのである。アントニオにとって、ウルティマの祝福の言葉における“in the name of all that is good and strong and beautiful”はカトリックにおける不可解な「神と子と精霊の名において」よりも理解しやすい。

ニューメキシコの土地に根付く人々は、スペインにルーツを持つヨーロッパからの征服者とその子孫、アングロアメリカンと呼ばれる白人、ネイティブアメリカン、といった3つの種類の人間と文化が融合しあって形成さ

れたヒスパニックであり、アナヤの好む名称で言うところのチカーノである。3種類の人間の存在は新しい可能性と文化を生み出している。アントニオの、ひいては作者アナヤの世界観と人格の成長は、この3つの文化を材料として形成されもたらされたものと言える。これら3つの民族と文化は、別個に存在するものではなく、ニューメキシコに共存するがゆえに互いに融和し、ニューメキシコ独自の民族性や文化を形成する「対価」となったのである。例えばアントニオはカトリック文化圏にいるが、スペインからもたらされたカトリックというよりは、ガダルルーペのマリア信仰という独自の信仰を持つ地域で育っていることが読み取れる。また、ウルティマがコマンチ・インディアンの過去の事件や埋葬方法を知っていたことで幽霊を鎮めることができたエピソードなどは、ネイティブアメリカンとチカーノの生活が共存していることを物語る。3つの文化を「対価」として育まれたチカーノ社会に伝統的に存在するウルティマが最も人々から信頼され問題を解決する実効力を持つことにおいて、チカーノ社会が持つ文化と可能性に対するアナヤの信頼が読み取れる。

アントニオはさまざまな人生における対立要素に直面し、時にはそのいずれかを選ばなければいけないのだろうかかと苦悩する。しかしこの作品における対立要素は実はつながりあっており、一体化していることが何度も示唆される。アントニオにとって身近なカトリックとウルティマが体現する民間信仰はニューメキシコの人々にとって両立し、融合しあうものと言える。ウルティマも呪術医の能力を持ちながら、カトリック信者でもある。アントニオの母マリアは敬虔なカトリック信者であり、息子を神父にすることを望みながら、ウルティマに敬意を持って接しており、その呪術に信頼を寄せている。このようにカトリックの文化圏にあって民間信仰は共存するが、アントニオが感じたカトリックの不条理の「対価」をウルティマの呪術が補うことで一体化して共存していると言える。

ウルティマは確かに不思議な力を持ち呪術を使う。しかしウルティマの魔法とは最終的に超自然現象ではなく、「人を思いやる力」であるとアントニオと父によって認識される描写からは、作者アナヤの人間の善性への信頼の念が読み取れるのである。アントニオは多くの対立要素に囲まれて育つが、ウルティマはそれらが全てつながっており、調和していることを教える。例えばアントニオの父の家系が受け継ぐ大地をかけまわるバケーロと母の家系が受け継ぐ寡黙に生命を育てる農夫という生き方、無垢と経験はつながりあっている。とりわけ「成長」を無垢の喪失ととらえる母の価値観と自然の変化ととらえる父の価値観の間で困惑していたアントニオにとって、ウルティマの最後の祝福の言葉は、無垢という「対価」によって生きていくための力と経験が得られることを示し、人生において何も不条理な喪失はないという説得力のある励ましとなる。

冷たく沈黙する理不尽なカトリックの神と、温かく人々を助け毅然と悪に立ち向かうウルティマとの対照性によって、明らかに征服者の文化ではなく、ニューメキシコに根差す人々が受け継ぐ精神文化への強い敬意が描き出されている。しかし同時に、この作品においてはチカーノのアイデンティティの主張だけでなく、アメリカにおいてきわめて普遍性を持つ「自己信頼」のテーマの主張もまた読み取れる。「対価」の概念によって論理的にアントニオが不条理を解消し成長を遂げる様子に、作者アナヤの、ニューメキシコに根付く民族固有の文化への愛とともに、自己信頼の精神を携えた開拓者としての共通経験でゆるく結ばれた「アメリカ」への愛が読み取れると言える。

#### 引用文献

Anaya, Rudolfo. "Aztlán: A Homeland without Boundaries." *Aztlán: Essays on the Chicano Homeland*. Edited by Rudolfo Anaya, Francisco A. Lomeli, and Enrique R. Lamadrid, U of New Mexico P, 2017.

----- *Bless Me, Ultima*. Grand Central P, 1999.

----- *Conversations with Rudolfo Anaya*. Edited by Bruce Dick and Silvio Sirias, UP of Mississippi, 1998.

----- *The Essays*. U of Oklahoma P, 2009.

----- *Tortuga*

Baeza, Abelardo. *Man of Aztlan: A Biography of Rodolfo Anaya*. Eakin P, 2001.

Cantú, Roberto. "Introduction." *The Forked Juniper: Critical Perspectives on Rudolfo Anaya*. Edited by Roberto Cantú, U of Oklahoma P, 2016.

Herrera-Sobek. "The Nature of *Jalamanta*." *The Forked Juniper: Critical Perspectives on Rudolfo Anaya*. Edited by Roberto Cantú, U of Oklahoma P, 2016.

Junquera, Carmen Flys. "Rudolfo Anaya's Shifting Sense of Place." *Landscapes of Writing in Chicano Literature*. Edited by Martin-Junquera, Imelda, Palgrave Macmillan, 2013.

Olmos, Margarite Fernández. *Rudolfo A. Anaya: A Critical Companion*. Greenwood P, 1999.

Pina, Michael. "The Archaic, Historical, and Mythicized Dimensions of Aztlán." *Aztlán: Essays on the Chicano Homeland*. Edited by Rudolfo Anaya, Francisco A. Lomeli, and Enrique R. Lamadrid, U of New Mexico P, 2017.